

# うらやす P-Life vol.21

ひとひと  
女と男が認めあい、共にかがやくまち・うらやす

2020年  
3月

## 指導者層が「知る」ことからの積み重ね

### スポーツ界はファイナルフロンティア

スポーツ界は、「ファイナルフロンティア（最後の未開拓分野）」と呼ばれるほど、性的マイノリティの人にとって厳しい環境が残っています。その理由の一つが、「強さ」を求めるスポーツ特有の「マッチョな男性性（男らしさ）」にあります。

スポーツはもともとパワーや技、スピードを競うものです。優劣をつけることで「強い者」が称賛される世界であり、「弱み」やミスは競技レベルが上がれば上がるほど許されなくなってきます。そうした、「男らしい強さ」の文化に馴染めない人にとって、スポーツ界は居心地が悪く、ときには排除される対象になってしまいます。

また、心と身体の性の不一致に葛藤を抱えるトランスジェンダーの人にとってスポーツは居心地の良い環境ではありません。スポーツは男女で明確に区別される競技がほとんどのため、トランスジェンダーの人であっても、もともと割り当てられた性別で区別され、本来の自分でない姿でスポーツをすることを強いられてしまうのです。

### きっかけづくりは指導者層から

その一方で、スポーツは心身の鍛錬になるだけでなく、さまざまな人との関わり方を学べるなど、自己実現や人間的な成長、社会性の育成を行う上で最適なツールでもあります。

性的マイノリティの人でも、周囲の目を気にせず、自分を偽らずにスポーツを楽しめるようになるには、ダイバーシティ（多様性）を受け入れる環境づくりが必要です。中でも、指導者層がダイバーシティに対する理解を持つことが欠かせません。

スポーツは上下関係が強く、選手は指導者に従うことが求められがちです。もし、指導者が性的マイノリティに対して理解がなかったり、誹謗中傷するような言動を取ったりしたら、どうでしょう？ 当事者は「ここには自分の居場所はない」と感じ、スポーツから遠ざかってしまうのではないのでしょうか。

そうした事態を避け、誰もがありのままにスポーツを楽しめるようになるには、指導者層から変わっていくことが必要です。

### 「いないだろう」から「いるかもしれない」へ

ここで必要なのは大胆な変化や変革ではありません。「自分のチームに“いるかもしれない”」という意識を持つことです。

「自分のチームに性的マイノリティの人はいないだろう」と思っている指導者が多いかもしれません。そういった指導者の先入観を、「もしかしたら性的マイノリティの人がいるかもしれない」という意識へ変えていく。小さな変化ですが、これが今、日本のスポーツ界で必要なことであり、今後、性的マイノリティの人を含むすべての人がスポーツを楽しむ上で大切なことです。

2016年のリオ五輪で50人以上の選手がカミングアウトしたことが話題になりました。もちろん、カミングアウトする・しないは個人の自由。大切なのは、「安全に言える環境」もしくは「言わなくても自分のありのままにいられる環境」があることです。

自分が自分でいられる環境は人権が守られ、尊重されている環境です。「いるかもしれない」という前提のもと、指導者層から当事者が直面する問題を知っていくことで、誰もが自分らしくスポーツを楽しめる時代が近づいてくるのだと思います。



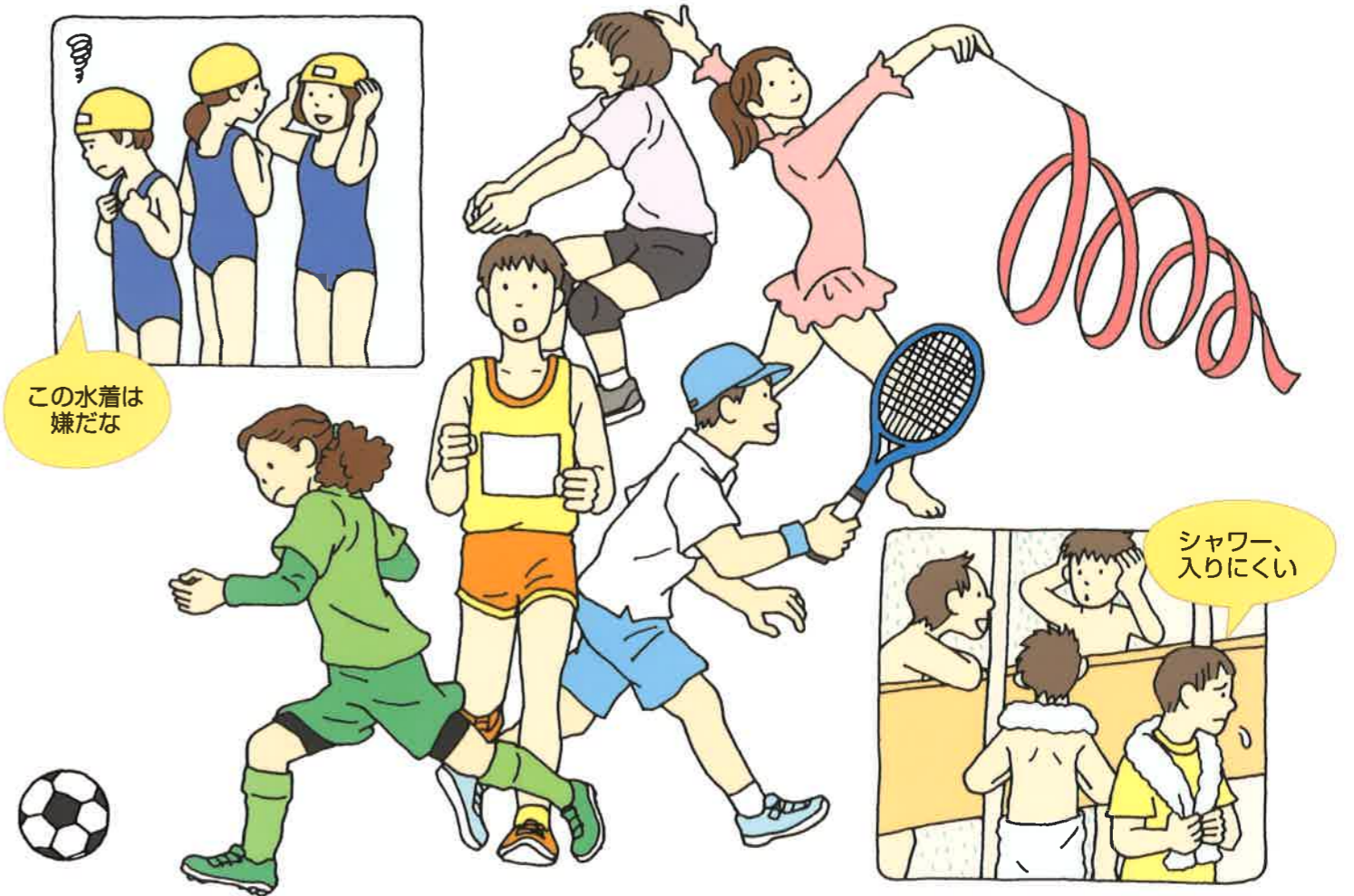
松中 権 (まつなか けん) さん  
認定NPO法人グッド・エイジング・エールズ代表。1976年、石川県金沢市生まれ。一橋大学法学部卒業後、株式会社電通に就職。海外研修制度にて米国NYのNPO関連事業に携わった経験をもとに、2010年、グッド・エイジング・エールズを仲間たちと設立。セクシュアリティを越えてすべての人が自分らしく素敵に歳を重ねていける社会づくりを応援している。

## LBGT とスポーツを巡る現状

# 誰もがスポーツを楽しむために 知っておきたいこと



スポーツの祭典として注目される「オリンピック・パラリンピック競技大会」。環境整備が進み、障がいのある人もスポーツで活躍する時代になりました。その一方でLBGT 等性的マイノリティの人はどうでしょうか？ 性的マイノリティの人がスポーツを楽しむ際に直面する課題について専門家に聞きました。



## 男女共同参画センター〈ルピナス〉 information

男女共同参画センター〈ルピナス〉では、「相談」・「講座の開催や図書の出し入れ等を通じての情報提供」・「市民の交流・ネットワークづくりの支援」をしています。

- 女性を抱えるさまざまな問題を自ら解決するための支援をしています。
- 女性のための相談（予約制）  
毎週月・火・木 10:00～16:00 ※ 14:30～20:00 の場合あり  
第2水・第4金 14:30～20:00
- 女性のための法律相談（予約制・月2回）
- 人権に関するさまざまな問題について、法務大臣から委嘱された人権擁護委員が相談に応じます。
- 人権相談（予約制）  
毎月 第2月 13:00～15:00



個室で相談が受けられます  
（※秘密は守られます）

## LGBT 等性的マイノリティのスポーツに関する困りごと

- 1 施設を含む環境の問題
- 2 “男女” しかない選択肢
- 3 心ない差別の問題

性的マイノリティ  
の人が  
直面する悩み

# スポーツをみんなが楽しむために必要なこと

スポーツは本来誰もが楽しめるものです。しかし、LGBT等性的マイノリティの人の中にはスポーツに抵抗感を覚える人がいます。どのようなことが問題になっているのでしょうか。また、解決のために必要なことは何でしょうか。

## 1 施設を含む環境の問題

性的マイノリティ、中でもトランスジェンダー<sup>※</sup>の人にとって、施設を含む環境の問題はスポーツを楽しむ上で弊害ともなりえます。更衣室やトイレ、シャワールームなどは、性的マイノリティの人だけでなく、誰にとってもプライバシーに配慮された環境であるべきです。また、部活動でよくある合宿での部屋割りや、試合などに参加申込する際の性別記入欄も当事者が居心地の悪さを感じる要因のひとつです。

■ 誰もが使いやすい施設のポイント

トイレ・シャワールーム	「誰でもトイレ」を設けたり、シャワールームを個室にしたりするなど、プライバシーを保てる環境をつくる。
申込書などの性別記入欄	慣習的に記入が求められる性別について必要性を吟味し、不要であればなくす、または任意にする。

松中さんから  
ひと言



『The 2017 National School Climate Survey』という、アメリカのNPOが2018年に発表した調査によると、性的マイノリティの生徒が学校内で避ける場所として、「トイレ」「ロッカールーム(更衣室)」「体育館または体育の授業」「運動場」が挙げられています。どれもスポーツに関わるものばかりで、これではせっかく本人が運動好きで才能があっても、途中で断念したり、遠ざかったりする状況が生まれかねません。このような状況を一気に解決する方法は一朝一夕には見つかりませんが、教育現場で個人のプライバシーを尊重した施設や制度を設計・導入したり、学校内のプライバシー保護などを地道に啓発していくことが大切です。

## 2 “男女” しかない選択肢

トランスジェンダーの人が違和感を覚えやすいのが、スポーツでの“男女”分けです。生まれたときに割り当てられた性別による男女分けは、学校の体育や部活動でそのまま慣習的に採用され、プロのスポーツ界でも男女別の競技が行われることがほとんどです。性別による分けが当然のこととして受け止められている環境は、性別違和<sup>※</sup>で悩むトランスジェンダーの人にとって大きなストレスになりえます。

■ 性別による分けの例と対策

性別による分けの例		できること
ユニフォーム	水着や柔道のインナーウェアなど、同じ競技でも男女によって色や形が異なったり、競技によってウェアの着用の可否が決められたりしている。	男女共通のデザインにする。柔道などでは男子もインナー着用可の機会を増やす。
競技	「女子だから○○○」「男子だから●●●」と、本人の意向に関係なく性別で区別してしまう。	本人の意思を尊重する。

スポーツ自体が「パワー」や「技」を競う“男性性(男性らしさ)”がとても強い側面を持っています。そのため、性別違和で悩むトランスジェンダーの人はもちろん、「男らしさ」「女らしさ」から外れてしまう人は疎外感を覚えたり、無理に自分を偽ることが求められたりしてしまいます。スポーツは慣習的に男女によって分けられ、「らしさ」(特に男らしさ)が強調されやすいものであり、それに違和感を覚える人がいるという現状を認識することが、スポーツをみんなが楽しむための第一歩です。

松中さんから  
ひと言



## 3 心ない差別の問題

性的マイノリティの人がスポーツを楽しむ上で壁となるのが、心ない差別の問題です。コーチや監督などの指導者が性の多様性を否定するような発言をただで当事者は心を閉ざしてしまいます。スポーツに関わった当事者への調査では、41.5%<sup>※</sup>が差別的な発言を聞いたことがあるとの回答が出ています。こうした居心地の悪さが積み重なって、スポーツが嫌いになってしまったり、続けられなくなってしまったりする可能性があります。

■ 偏見や差別の例

- 「ホモ」や「オカマ」「レズ」などからかう。
- 「問題があるのでは?」「気持ち悪い」などとうわさ話をする。
- 当事者の性的指向や性自認を、本人の了解を得ずに暴露(アウトティング)する。

※出典 日本スポーツ協会の調査より。

松中さんから  
ひと言



特に指導者からの差別的な発言は、当事者が「この場にはいられない」「何かあっても相談できない」と感じてしまうため、注意が必要です。また、「アウトティング」は葛藤を抱える当事者に心理的なショックを与えるものであり、命の危険にもつながりかねないものです。スポーツの現場でもアウトティングによる被害を生み出さないよう気を付けなければいけません。

知っていますか?

### スポーツと性的マイノリティに関する用語集

- セクシュアリティ** 性の在り方。性自認(心の性)、生物学的性別(身体の性)、性的指向(好きになる性)などから成ります。
- SOGI (ソギ、ソジ)** Sexual Orientation and Gender Identity (性的指向と性自認)の頭文字。すべての人の性の在り方に関わる、LGBTより広い概念。
- LGBT** 多様な性の在り方における表現のひとつ(L:レズビアン、G:ゲイ、B:バイセクシュアル、T:トランスジェンダー)。
- ※トランスジェンダー** 出生時に割り当てられた性別とは異なる性別を生きる(ことを望む)人。割り当てられた性別に対して違和感(性別違和)を覚える人も多い。
- カミングアウト** 自分の性的指向や性自認について、自らの意思で望む相手に伝えること。
- アウトティング** 本人以外の方が、本人の承諾なく、その人の性的指向や性自認を暴露すること。
- アライ** 性的マイノリティの置かれた状況を理解し、自分事として、その状況を改善するために行動する支援者、仲間。
- 調達コード** 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に関わる物やサービスを調達する企業が守るべきガイドライン。この中には性的マイノリティ(LGBT等)の権利の尊重が含まれ、人権保護の観点で調達物品等の製造・流通を行うことが明記されています。